
短編集

青山 沙伊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N5264Q

【作者名】

青山 沙伊

【あらすじ】

脳裏を駆け抜けたものを。

放課後。チャームと共に教室を出て行くクラスメート達。週末とあれば、遊びにデートにと忙しいのだろう。

かく言う俺とは言えば、浮き足だった彼らを横目に、黒板の内容を必死に書き写していた。

「休み明けにテストするぞ！」などと担当教諭が言うもんだから、見ての通り地獄である。しかも授業は覚えなければ勝負にならない英語と来たもんだ。気分はまさにメモリー・オア・ダイ。しかも黒板はぐちゃぐちゃの筆記体。これはあれか、新手的嫌がらせなのか。それとも、寝潰れていた俺に対する当てつけか。

しかし、諦める訳にはいかない！ 喻え世界が滅んだとしても、俺はお前をこのちっぽけな頭の中に刻み込んでやる！

授業中を寝て過ごした俺は体力を温存している。そうだ、今ならやれる。俺がライフハッカーの力を見せてやる！

のんびり休んでから一気にやって勝利、それが俺の信条のハズだ。さあ、ウサギとカメとライフハッカーをご覧に入れ

「黒板消すよー」

おうふ。

ライフハッカー は しんでしまった。

「あれ、まだ書いてたんだ」

「ああ、残念ながら」

目障りだったぐちゃぐちゃの筆記体が消えて無くなった。

まだ写し終わっていない所だけを綺麗さっぱり消しさってくださいだったのである。

「誠に遺憾です」

そう言っただけのためらいも無く黒板は真っさらになった。

ついでに俺の記憶も真っさらであり、ノートも真っさらである。

恐らく週明けのテストも真っさらだろう。成績が赤字で書かれて俺

は一年間の一回休みを喫する事になるんだろう。

ああ、強くてニューゲームでヤツだな。

「そんな世界の終わりみたいな顔しなくてもいいんじゃない？」

軽く苦笑いを浮かべて、日直の彼女は俺を見た。もう既に半分消された黒板を見て、俺は週明けのテストを諦めた。

ペンを投げ捨て、イスに仰け反ってみる。運動場で喧しく叫ぶ運動部の声と、吹奏楽部のチューニングが聞こえ始めていた。

「つい今し方綺麗さっぱり終わったよ……俺の世界」

彼女は黒板消しを持ったまま、席に座った俺を見て悪戯っぽく笑った。

「ふーん、この辺とか？」

『テストに出る！』と書かれた所を彼女の黒板消しがなぞる。唯一残っていた重要そうな単語はあれよあれよという間に消えてしまふ。

「ああ！ 五点くらいなくなった！」

「じゃあ、この辺も？」

同じく、テストに出そうな所を丹念に消していく彼女。

「ぐわあ！ 赤点だ！」

そして楽しそうに笑う彼女。この娘はいつもこうして俺をからかって、俺の反応を楽しんでいる。

端から見ればバカツプルの典型だそうだが、付き合いではない。そもそも、付き合いというのはどういう事なのだろうか。ただの仲良しという事ではないんだろうが、昔からの腐れ縁な俺達は、そこいらのカップルよりお互いの事を知っていると思う。

「キミは今日も寝てたね」

彼女は俺のことをキミと呼ぶ。他の男は名前やあだ名で呼ぶくせに、だ。他人行儀というヤツなのだろう。何せ幼稚園の頃からの友人なのだから、そんな気持ち芽生えても無理はないのかもしれない。俺も彼女をお前と呼ぶ。昔は名前で呼び合っていたのに、いつの間にやら気恥ずかしさやら何やらが吹き出して、わだかまってい

る。

「何、俺を観察してたの？ ストーカー？」

「いやいや、キミの後ろの席だし」

そう言っただけ俺の後ろを指さす。綺麗に片付いた机の上に、帰り支度を済ませた鞆が置かれていた。

「ホントだ！」

「昨日もしたよね、このやりとり」

彼女は溜息混じりに言い放つと、俺の後ろに座った。半身になって、横目で彼女を見る。鞆にあごを置いて、じーっと俺を見ている。

「俺の観察は楽しいか？」

「夏休みの自由研究にしたいくらいだよ」

「まだ春だけだな」

彼女は少し回りくどい。もどかしい、という言葉がぴったりと合っているような女だ。

「で、研究成果はどうだ？」

「そうだね、まずヨダレが出てるよね」

腕で拭くと、確かにヨダレが付いていた。全く、授業中にヨダレ垂らす程眠るとはどうしようもないヤツだな俺は。

「あと、教科書を枕にした跡がほつぺたに付いてるよ」

「え？」

「ほらほら、これ」

彼女はそう言っただけポケットから手鏡を取り出した。確かにほつぺたにくっつきりと折り目が付いている。何ともまあ、今起きた感丸出しだ。

それよりも、手鏡なんか持ち歩いていることの方が新鮮だった。オシャレになんて気を遣っていたんだなこいつは。長年一緒に居た気がするのになんな事にすら気づかないとは。

俺も老いたな……。

「つか手鏡なんて持ってるんだな、お前が」

「私だって女の子です」

「信じられんね」

吐き捨てるように呟く。何というか、女なんだが女だと思えない。あくまで悪友というか、同性の友人のようなヤツだったのだ。しょうもない遊びに付き合ってくれる気のいい女友達だと俺はずっと前から思っていた。だから彼女が俺のことを「キミ」なんて他人行儀に呼び始めてから、より一層あいつの事を意識しなくなっていたのだ。

「そっか。じゃあ確認してみてもいいんだよ？」

そう言つと、彼女は俺の鼻先にまで顔を近づけてくる。近くで見るとそれなりに可愛い。だが彼女に恋をするなんて感情は今まで一切抱くことは無かった。

「何をどう確認するんだよ」

「女の子の唇は柔らかいらしいよ」

一瞬何が起こつたのか全く分からなかった。なにか柔らかいものが俺の唇に触れた気がして、やけに近いあいつの顔を見た時にキスされたのだと気づいた。

これは一体なんなのだろう。全身の血液が逆流するような、鳥肌が体中でぞばだつような未知の感覚。まだ自分の唇には、柔らかくしっとりとした寒色が残っている。

「どう？ 女の子でしょ？」

そう言つて胸を張る彼女。不思議と、彼女が違つて見えた。腐れ縁な悪友と思っていたあいつが、いつの間にか一人の女の子になっていることに、違和感を覚えた。そして、心臓がばくばくと音を立て始めた。何故こんなに緊張するのか分からない。いつもの冷静でひねた俺は、さっきのキスで吹き飛んでしまったみたいで、目の前に居る彼女から目を離すことができないでいる。

「いや、唇が柔らかい男の子かもしれん。流行ってるじゃないか男の娘とかそういうの」

いつもの様な冗談で流そうとする。

「そっか、じゃあこっちな」

彼女は俺の手を握りしめた。手のぬくもりが伝わってくるのと同じく、小刻みな震えが伝わってくる。俺の手が震えてるのかと思っただけ、そうではなかった。

俺の手は彼女の胸元に滑り込み、柔らかな胸の感触を白いブラウス越しに感じる。胸を触っていると、彼女の鼓動が直に掌に伝わってくる。俺の鼓動とシンクロしそうな程早い、ドクドクと血が流れる音。

「ね、女の子でしょ？」

「いや……」

「私は……女の子なんだよ……？」

より強く握りしめられた手が、胸元に吸い寄せられる。無意識のうちに、手が動いていた。片手にちょうどおさまる大きさを、余すところなく揉み動かしている。

「女の子なんだから、大切にしてほしいんだよ……？」

彼女は握っていた手を離れたが、俺の手は止まらない。止めることが出来ないでいた。あいつは腐れ縁の友達だった。同性の友人と同じように接してきた。

それでも、俺は心のどこかであいつを女だと思っていたのかもしれない。意識はしなかったが、女だとは思っていたのかもしれない。「ねえ、これでも女の子じゃないと思う？」

あいつは、夕日のように赤い顔で、俺を見ていた。うつすらと涙がにじんでいた。

「キミの事が好き……。ずっと前から」

誰も居ない教室。帰ってくる者も出て行く者も居ない、二人だけの場所。

今度は俺の方から、彼女にキスした。鼓動は隠せない。俺も、あいつの事が好きなのかもしれない。

「……ここで、なの？」

前のめりになって、彼女の体にもたれかかる。椅子に座った彼女を覆うような体勢になり、右手は胸元、そして左手を近づけていく。

「ここじゃダメっ……」

か弱い悲鳴をあげようとする彼女の口をキスで塞ぎ、ゆっくりと指先を這わせていく。

(後書き)

美少女ゲームのシナリオ向け練習。
日常↓エロの流れ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5264q/>

短編集

2011年1月30日21時10分発行